

## 講演：協働学習と日本語教育スタンダード

齋藤ひろみ先生（東京学芸大学）



### <資料の補足>

齋藤先生のご専門は海外から日本に来た子どもたちへの日本語教育。当シンポジウムでは海外（モンゴル）における外国語としての日本語教育がテーマ。両者には多少違いがあるが、子どもの発達に焦点を当てると共通点があり、ご講演はそこにフォーカスしたものの。

## I 協働学習と日本語教育スタンダード

### 協働学習（ピア・ラーニング）

- ・ 読解、作文等いろいろな形で導入されている。積極的に推進している2名の先生によると、主要概念として以下の5つがある。
  - 対等：学習者同士に加え、学習者と教師間も対等の関係が尊重される。教師は日本語については知識やスキルを持っているが、学習者は違う経験や知識を持っているかもしれないので、それを生かすことができる。
  - 対話：単なるやりとりだけでなく、やりとりの中にお互いの考え方など新しい価値を見出そうという対話でなければならない。
  - プロセス：結果として言語ができるのではなく、経過の中で言語を使う。そのプロセスが重要である。
  - 創造：新しいものを作り出す、新しい価値に気付く、新しい意味を知ること。いつもと違う側面から見ること。
  - 互惠性：お互いがお互いにとってリソースとして役に立つ。
- ・ 学習者同士が協力するのが大切。学習者は一人ではなく、また教師の助けを受けるだけでもない。
- ・ 学習課題を遂行することが大切。学習課題とは、何かを覚えるのではなく、何かを探求するような課題のこと。知らなかったことを知ったり、調べた結果から判断したり何かを作ったりすることが重要である。

## 仲間との学び

- ・ 「一人でできること」だけがその人の力ではなく、「サポートしてできること」も含めて能力となる。「一人でできること」と「サポートしてできること」とは違いがあるが、それを発達の最近接領域という。
- ・ “大人が子供をサポートする”という最近接領域の概念を、VanLeirが“子供同士、仲間同士でサポートする”という考え方に発展させた。
  - A（教師や仲間からの支援）：ヒントをあげる・もらう
  - B（仲間とのインターアクション）：仲間同士と双方向でやりとりをする。互いからももらう情報をまねしながら成長、発達できる。
  - C（力の弱い仲間とのインターアクション）：協働学習において能力が高い子は学べないかと言うと、そうではない。力の弱い仲間に教えることで、もう一度学んだり応用したりすることができる。
  - D（内的リソース）：仲間に伝える前に自分の中で自身と対話する。そして、仲間とのやりとりの後、自分で考える。

## Can-do を意識して協働学習へ

協働とスタンダードをどう合わせていくか。そのためにはコースとして、コミュニケーション力の向上に加え、仲間と協働して課題解決をする力を育成することをねらいとする。

- ・ まず、コース全体の狙いに合う Can-do を探す。自分で作ることもできる。
- ・ そして、探究課題を設定する。これが協働学習においては大切。探究課題とは、たとえば“得意なことについて話せる・きける・コミュニケーションできる”ということではなく、“日本の男子生徒が得意とと思っていることについて研究する”というようなこと。
- ・ 中西先生のルーブリックの中に「遊牧文化を考える」というトピックがあった。遊牧文化について知ることも探究課題になる。
- ・ 学習者の年齢や学習歴、知識や経験を考慮した探究課題の設定を行わなければならない。
- ・ 活動の組み立ての工夫も必要である。
- ・ 受容（分かればいい）→やりとり（単語でもいい）→産出（理解できた）という順番だと負担が少ない。子どもの場合はこれが一番よいのではないか。
- ・ 個人の活動→ペア・グループなど協働で課題を解決する活動→全体で発表する活動、という順で進める。グループを作るのがポイント。その際、何もしない生徒を作らないことが大切で、それぞれ何か提供できる力をもって参加してほしい。
- ・ また、その活動が、知識を問うような問題ではなく、課題解決型の活動（推測して調べて何か答えを出すような活動）であること。

## II 体験しよう 世界各地のハンバーガー

<5種類のハンバーガーの写真を見て、それぞれが世界のどこで売られているのか、考える>

まず個人で考える

→次にとり合いの人とペアで話し合う

→数ペアが全体の前で発表する

→最後に気づいたことをペアの人と話し合ってから書く

<この活動を通じて気づいたことは何か、数人の参加者が発表。>

- ・一人では自信のない意見でも、話し合うことで確信できたり、理解できたりした。
- ・隣りの人の印象が良くなった。
- ・「実際に〇〇でこのハンバーガーを食べたことがあるから、これは〇〇のハンバーガーだ」とペアの相手が言ったためそう思ったが、実際にはそこではなかった。そこから、実際にしたことは説得力があって、それを覆すにはそれ以上の理由や根拠、知識が必要になることが分かった。

実際の授業では、情報を提供しながら、国や宗教によって、また特産品によって、売られているハンバーガーが異なるということ意識しながら振り返りを行う。そうすることで、グローバル化やその中の個性を考えたり知ったりすることにつながる。

先ほど、経験が答えに反映されなかったというコメントがあったが、それによって知識や経験がある人がない人に伝える意味を考えることができ、内的リソースの意識づけになったと思う。

また、この授業では文法は一切書かれていないが、「〇〇で売られています」「××で作られています」等受け身の形を積極的に使い、このような場面ではこのような言い方をすると自然に設定していた。これは学習者には直接伝えなくてもよい。

### Ⅲ 体験した活動を振り返る

#### コースの全体像（イメージ）・Can-do ⇔ 具体的な授業の設計

- ・課題の内容は、日本語学習者だからといって日本社会だけである必要はない。
- ・授業全体に Can-do が使われている。普段の授業でも受容と産出が一緒になっているので分けるのは難しいが、この活動は受容中心なども考えられる。
- ・この目標を3回分に、またはコース全体に広げることができる。

#### 協働の学び…課題設定と活動構成

- ・知っていることを確認するかるた取りのようなゲームではなく、知的好奇心を刺激する探究型の授業が必要。
- ・マクドナルドワークは、その後宗教の分布図や内戦、紛争がある地域の写真を見せたりしていた。

- ・教師の発言がモデルになって、それが支援となり学習者の発話につながっている。

### 教師の役割：スキヤフオールディング

協働学習や内容中心の教育を行うときに教師はどのような支援を行うことが必要・有効なのか。それは、この通りしなさいということではなく、どうやって困難を乗り越えていくか、その支援が大切。

「スキヤフオールディング」：一人ではできないが支援があればできるというとき、その支援を行う。

- ① モデルを示す：教師の発話、CD等。単語・発音・短文のモデルはよく聞かせているが、談話の組み立て方についてもモデルも出すべきである。問いに対しどのような言い方や内容構成で答えるべきか。モデルの示し忘れがないように、気を付ける必要があると思う。また、丁寧体や話し言葉についても、丁寧な会話やくだけた表現を教師が演じ分けることも大切である。
- ② 既有知識と関連付ける：今回のマクドナルドワークでも、もともと知っていた知識が写真を見ることで活性化された。それが授業の狙いの一つ。経験したことをうまく引き出す教材や質問が重要な支援になる。何かを学ぶとき、まっさらな状態で学ぶのではない。今ある状態やできることをやってみて、それでも知らない・できない・わからないという状態から気づきが出る。
- ③ 文脈化する：視覚化したり動作を見せたりして、意味が分かる状態で言葉を提供する。意味と形をマッチングさせるだけではなく、どのような場面でどのような機能で使うのか提示することも必要。
- ④ スキーマの構築：体系化された既有知識のどこに位置づくのか分かるようにする。そうすることで、すぐに忘れなくなる。たとえば、な形容詞を教える際、い形容詞を復習し、その違いを確認させ、物事を形容するのはな形容詞という違う形の言葉でもできると提示することもできる。
- ⑤ テキストの再表現：同じことでもいろいろなスタイルで繰り返し提示する。それが言葉を運用する場面ではとても大切になる。
- ⑥ メタ認知の発達：どのような学習でうまくいっているのか、またはうまくいっていないのかを外側から客観的に知る。評価するためのヒントを与え、指導することが重要。メタ認知の発達により言語学習をすることの意味を深く理解でき、スキルを身につけるだけでなく、新しい場所・世界に行ったときに自分の力で新しい言語を身に着けることができる力になる。

### 語学教育のさらなる展開

- ・メルゲド学校のドラムスレン先生が保護者にスタンダードで学ぶ意味や、それにより子どもたちも学習に前向きになっていることを伝えている。日本語を学ぶ価値が保護者に

も伝わることで、保護者も改めて捉え直し、言語教育についての社会的な認知が変わる可能性もある。

- ・ コミュニケーションの力が学習者にどう役に立つか考える。スタンダードは大きい教育の理念を実現するためのヒントになる。
- ・ 成績のための活動ではなく、社会に出ていき、日本語で自分の意見をどう伝えていくか、自分は何者で、この社会にどう貢献したいのか、どうなりたいと思っているか等を隣にいる仲間と話して人として成長していくための道具として、日本語という言語を用いる。

## 質疑応答

Q1: 人文大学 プレブスレン先生

協働学習を導入するには、国民性・文化は関係があるか。主にヨーロッパは個人主義、東洋は団体主義という特徴があるが、それらは影響するか。それとも、教師の努力次第なのか。

A1: 仲間と話し合う態度には差異があると思う。自分の意見を言える国もあれば、日本のように反対意見や違う意見を示す場合には配慮を示す人が多い国もある。協働学習の場合、個人的な感情とは異なる認識の部分で、どんな意見があってもいいと思う課題の設定が大事である。

個人で考えて全体でシェアしていくような授業が無難であると言ったが、日本では特にそれがあつたほうがいい。また、リーダー格の学習者が強引に進めてしまう可能性を小さくするために、自分の意見は必ずメモして書かせることが大切で、そのようにすることで全員が意見を口に出しやすくなる。言いにくそうな学習者にはサポートをするなどしてフォローできる。

活動展開の工夫、資料の工夫（頭の中の知識ではなく、資料から読み・感じ取ることができるから、伝える内容があり、内的リソースだけに頼らない）、そして、それを行う工夫が重要である。